

ダニエル書 - 第四十一番

パウロの預言的な奉仕：古代イスラエルと霊的イスラエルを結びつける

Jeff Pippenger

2024-01-05

使徒パウロは、古代イスラエルと霊的イスラエルを結ぶ架け橋であった。彼の奉仕、名、個人的な事情、および預言的な働きが、いずれもこの真理を証ししているからである。彼は、神の民を迫害していたため、自分を使徒たちの中で最も小さい者だと認めた。

私は使徒の中で最も小さい者で、神の教会を迫害したので、使徒と呼ばれるにふさわしくありません。コリント人への第一の手紙 15章19節。

回心の際に彼に与えられた名はパウロで、「小さい」あるいは「小さな」を意味する。彼は使徒たちの中で最も小さな者だったからである。しかし、彼のもとの名はサウルで、「選ばれた」を意味する。

するとアナニアは答えた。「主よ、この人がエルサレムであなたの聖徒たちにどれほどの害を与えてきたかを、多くの人々から聞いております。しかも彼はここでも、あなたの御名を呼び求める者を皆捕縛する権限を祭司長たちから与えられています。」しかし主は彼に言われた。「行きなさい。彼は異邦人たちと王たち、そしてイスラエルの子らの前でわたしの名を担うために、わたしが選んだ器である。」使徒行伝 9:13-15

パウロは異邦人に福音を携えていくための『選びの器』であったが、まず回心してへりくだり、パウロ（小さい者）へと変えられなければならなかった。というのも、やがて彼には強さが求められることになるからである。パウロは、自分の力は自らの小ささ、すなわち弱さのうちにこそあるのだと理解していた。

また、数々の啓示が過分に与えられたために私が思い上がることのないよう、私には肉体のとげが与えられました。すなわち、私を打ちのめすためのサタンの使いであり、私が思い上がることのないためです。このことについて、私はそれが私から去るようにと三度主に願いました。すると主は私に言われました。「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さのうちにこそ完全に現れるのだ。」それゆえ、私はむしろこの上なく喜んで自分の弱さを誇ります。キリストの力が私の上に宿るためです。だから私はキリストのために、弱さ、ののしり、困窮、迫害、苦難を喜んで受けます。なぜなら、私が弱いときにこそ、私は強いからです。コリント人への第二の手紙 12:7-10。

パウロは「選ばれた」が、強くなるために小さくされた（パウロ）。彼は異邦人に福音を伝えるために選ばれたが、選ばれたのは部分的には旧約聖書の知識ゆえでもあった。

とりわけ、あなたがユダヤ人の中にあるすべての慣習や諸問題に精通しておられることを私は知っていますので、どうか忍耐をもって私の話をお聞きください。私が若いころからどのように生きてきたか、すなわち初めはエルサレムで自分の同胞の間で過ごしていたことを、ユダヤ人は皆知っています。彼らは初めから私を知っており、も

し証言するなら、私が私たちの宗教のうちでも最も厳格な派に従って、パリサイ人として生きてきたことを証言するでしょう。使徒の働き 26:3-5

サウロは、旧約聖書の教えに関して最も偉大な教師の一人とされていたガマリエルに師事していた。

その願いは聞き入れられ、『パウロは階段に立ち、手で群衆に合図した。』その身ぶりは彼らの注意を引き、彼の振る舞いは敬意を抱かせた。『そして非常な静けさが起こると、彼はヘブライ語で彼らに語って言った、「諸君、兄弟たち、父たちよ、今あなたがたに向かって述べる私の弁明を聞きなさい。」』なじみのあるヘブライ語の言葉が聞こえると、『彼らはいっそう静まり返り』、全体が沈黙する中で、彼は続けた。『私は確かにユダヤ人の男であり、キリキアの町タルソで生まれた。しかし、この都でガマリエルの足もとで育てられ、父祖たちの律法の最も厳密な規範に従って教えを受け、きょうあなたがたすべてがそうであるように、神に対して熱心であった。』彼が言及した事実は、なおエルサレムに住む多くの人々に周知のことであったので、使徒の述べたことを否定できる者はだれもいなかった。『使徒行伝』408。

サウロは無作為に選ばれたのではなく、パウロの宣教の務めの具体的な目的の一つは、文字どおりのイスラエルの聖史を霊的イスラエルの聖史と橋渡しすることだった。この事実と相まって、彼は新約聖書の大部分を著した。彼の著作の一章は、第一の天使のメッセージの枠組みの根拠を示すとともに、第三の天使のメッセージの枠組みの根拠も示している。その箇所は、アドベンチズムの始まりと終わりにおける賢い者と愚かな者の区別を明らかにする、アドベンチズム史の記念碑的な一節である。

さて、兄弟たちよ、わたしたちは、わたしたちの主イエス・キリストの来臨と、わたしたちがその方のもとに集められることについて、あなたがたにお願いします。あなたがたが、すぐに心を動かされて動揺したり、うろたえたりしてはなりません。霊によっても、言葉によっても、あるいは私たちから出たかのような手紙によっても、「キリストの日が差し迫っている」と騒がされることのないように。だれにも、どんな手段によっても、だまされてはなりません。まず背教が起こり、不法の人、滅びの子が現れなければ、その日は来ないのです。彼は、神と呼ばれるものや礼拝されるものすべてに反抗し、それらの上に自分を高め、神の神殿に座して、自分こそ神であると示すのです。わたしがなおあなたがたと一緒にいたとき、これらのことを話したのを覚えていないのですか。今、彼が自分の時に現れるために何がそれを押しとどめているのかを、あなたがたは知っています。不法の奥義はすでに働いています。ただ、今それを抑えている者が、やがて取り除かれる時まで、抑え続けるでしょう。そしてそのとき、不法の者が現れます。主はその口の息をもって彼を滅ぼし、ご自身の来臨の輝きによって彼を打ち滅ぼされます。彼の来臨は、サタンの働きに従い、あらゆる力としるしと偽りの不思議を伴い、また、滅びる者たちの間でのあらゆる不義の欺きによって行われます。彼らは救われるために真理への愛を受け入れなかったからです。それゆえ、神は彼らに強い惑わしを送り、彼らが偽りを信じるようにされます。こうして、真理を信じず、不義を喜んだ者たちがことごとく裁かれるためです。テサロニケ人への第二の手紙 2章1-12節

この箇所は、パウロの文脈は、キリストの再臨がいつ起こるのかという点の考察である。パウロは、「私がまだあなたがたと共にいたとき、これらのことを話しておいたのを覚えていないのですか」と述べて、その懸念にはすでに答えていたことをテサロニケ人に思い起こさせている。パウロは、「私たちの主イエス・キリストの来臨と、私たちが主のもとに集められること」という主題について、兄弟たちが惑わされないようにしようとしていた。

歴史家たちは、ウィリアム・ミラーのメッセージの半分は、ダニエル書8章14節の二千三百年に関する彼の解釈に基づいていたと指摘している。彼のメッセージのもう半分は、しばしば見過ごされているが、キリストの再臨に関する誤った教えを論駁するという彼の働きである。

イエズス会の誤った方法論に基づく、ウィリアム・ミラーが一貫して反対した有力な誤った教えが存在した（そして今も存在する）。それは、主の再臨に先立って「地上の千年期」と呼ばれる平和の千年があるという誤った教えで、ホワイイト姉妹もこれに反対した。

ミラーの働きはまた、彼の時代に一般的だった千年王国に関するさまざまな誤った観念に対抗して、キリストの文字通りの再臨という真理を確立することにもあった。パウロは『テサロニケ人への第二の手紙』で再臨を扱っており、その箇所はミラーの文字通りの再臨理解の一部を成していた。その章はミラーにとって「現在の真理」であった。

パウロは再臨に関連する重要な出来事の順序を示し、またテサロニケ人が自分たちの存命中に主の再臨を期待すべきではない理由の論理も提示している。パウロはこう言う。「さて、兄弟たちよ、私たちの主イエス・キリストの来臨と、私たちが彼のもとに集められることについて、あなたがたに願い求めます。」 「beseech」という語は「尋問する」という意味である。パウロは再臨に関わる要素を論理的に解き明かし、聴衆を一種の尋問のかたちで導くことによって、聞き手に彼の論理を分析させようとしている。

彼の論理の筋道は、キリストが二度目に再臨する前に、教皇制が特定され、支配していなければならない、そして教皇制が歴史に登場する前には背教が起こらなければならない、というものである。背教はなお将来のことだったので、教皇制の到来はそのさらに先のことだった。では、どうして誰かがキリストの再臨が間近だと欺かれることがありえたのだろうか。彼は、背教の後に現れるその権力が何者であるかを確定するために、教皇制を表すいくつかの象徴を用いている。彼は教皇制を「不法の人」「あの不法の者」「滅びの子」「不法の秘密」と呼ぶ。ホワイイト姉妹は、これらがすべて教皇制を識別する象徴であることを明確にしている。

しかし、キリストの来臨に先立って、予言されていた宗教界の重要な出来事が起こることになっていた。使徒はこう宣言した。「すぐに心を動揺させたり、うろたえたりしてはならない。霊によってであれ、言葉によってであれ、あるいは私たちからのものとされた手紙によってであれ、キリストの日が差し迫っているかのようにしてはならない。どのような手段によっても、だれにも欺かれてはならない。その日が来るのは、まず背教が起こり、不法の者、すなわち滅びの子が現れなければならないからである。彼は、神と呼ばれるすべてのもの、また拝まれるものに反抗し、それらすべての上に自らを高く掲げ、ついには神の宮に神のように座して、自分を神であると示すのである。」

パウロの言葉は誤解されてはならなかった。彼が特別な啓示によって、キリストの差し迫った来臨をテサロニケ人に警告したのだと教えるべきではなかった。そのような立場は信仰の混乱を招く。というのも、失望はしばしば不信に導くからである。ゆえに使徒は、兄弟たちに対し、その種の知らせを自分から出たものとして受け取らないようにと戒め、さらに、預言者ダニエルによってきわめて明確に描写されている教皇権が、やがて台頭して神の民に戦いを挑むことになるという事実を強調した。この権力がその致命的で冒瀆的な働きを遂げるまでは、教会が主の来臨を待ち望むのはむなしなことであった。「覚えていないのか」とパウロは尋ねた。「私がまだあなたがたと共にいたとき、これらのことを話したではないか。」

真の教会を襲うことになる試練は、恐るべきものであった。使徒が記していたその時でさえ、「不法の秘密」はすでに働き始めていた。将来起こるはずの出来事は、『サタンの働きに従い、あらゆる力としるしと偽りの不思議を伴い、また滅びる者たちの中にある不義のあらゆる欺き』によってもたらされることになっていた。

「『真理への愛』を受け入れることを拒む者たちについての使徒のことばは、とりわけ厳粛である。『このゆえに、』と彼は、真理のメッセージを故意に退けるすべての者について宣言した。『神は彼らに強い惑わしを送り、彼らが偽りを信じるようにされる。すなわち、真理を信じないで不義を喜んだ者たちが皆、さばきに定められるためである。』人は、神があわれみによって彼らに送られる警告を、罰せられることなく退けることはできない。これらの警告に背を向け続ける者たちから、神は御霊を取り去り、彼らの好む欺きに彼らを委ねられる。Acts of the Apostles, 265, 266.」

ホワイト姉妹は、パウロの記述にある「罪の人」「不法の者」「滅びの子」および「不法の奥義」を直接に特定し、それを「教皇権」と呼んでいるが、彼女はさらに多くを語っている。さらに彼女は、パウロがローマの教皇を指し示すために用いたこれらの象徴がダニエル書に基づくものであることを、次のように述べて明らかにした。「それゆえ、使徒は、そのような知らせが自分から出たものとして受け取らないよう兄弟たちに警告し、預言者ダニエルによってきわめて明確に描写されている教皇権が、なおやがて起こって神の民に対して戦いを挑むことになる、という事実を強調した。この権力がその致命的で冒瀆的な働きを成し遂げるまでは、教会が主の来臨を待ち望んでもむなしなのである。」パウロは、テサロニケ人への手紙のうち教皇権を指し示す部分を、ダニエル書11章36節に基づいて述べていた。

その王は自分の思うがままに行い、自らを高くし、すべての神々にまさって自分を大いなるものとし、神々の神に逆らって驚くべきことばを語り、憤りが成就する時まで栄える。定められたことは必ず行われるからである。ダニエル書 11:36

パウロが、神と呼ばれるもの、また礼拝されるものすべてに逆らい、自らを高くし、神であるかのように神の神殿に座して、自分が神であることを示す者として教皇を指摘しているとき、パウロは、預言者ダニエルが「自分の望むところのとおり」に行い、「自分自身を」高め、「すべての神々の上に自分自身を」大いに高めた「王」の描写を言い換えていたのである。教皇は「神々の神に逆らって驚くべきことばを語る」王であり、また教皇は、1798年に最初の「憤り」が「成就する」まで「栄える」権力である。

1989年における知識の増加を正しく理解するためには、ダニエル書11章36節を正確に理解することが絶対に不可欠である。このため、ウライア・スミスが唱えた「その節の王はフランスである」という誤った教えが、アドベンチズムの第一世代（1863年から1888年）に導入された。スミスは36節の本文を「the king（前の節々で描写されている教皇制）」から「a king（どんな王でもよいという意味）」へと変え、無神論のフランスにローマの礼拝様式の特徴を当てはめようとしたが、それは40節以降の「北の王」をトルコとする彼の持論を展開するための単なる足がかりにすぎなかった。

サタンは早くから、その聖句における王がローマ教皇制を指しているという事実を覆い隠そうとしてきた。そして、この事実についてダニエルの証言に第二の証人となっているのは使徒パウロである。第三の証人はホワイト姉妹である。

サタンは、聖句に出てくる王がローマ教皇を指すという真理を覆い隠そうとしただけでなく、聖句に含まれる真理を曲解させることで、その聖句の「憤り」が何を表しているのかという意義も曖昧にした。その聖句における教皇権は、1798年に致命的な傷を受けるまで栄えるはずであった。1798年は、紀元前723年に始まり、イスラエル北王国に対して執行された神の憤りの二千五百二十年の終わりである。

もしアドベンチズムが1863年に「七つの時」を擁護し堅持していたなら、ユーライア・スミスが三十六節についてのそのような愚かな主張で逃げおおせることは、事実上不可能だったろう。というのも、「憤り」は「七つの時」における神の最初の憤りを表すものとして理解され、したがってフランスとは全く無関係だと見なされたはずだからである。1989年の知識の増加はその箇所でもパウロによって裏づけられており、このため、真理への愛を受け入れずに強い惑わしを受ける者たちについてその箇所でもパウロが与える警告は、彼らとその箇所でもパウロの提示する真理を拒むことによって現実のものとなる。そうした真理の一つは、ダニエル書11章40節から45節における北の王の正しい特定である。

その箇所でも、パウロはローマの教皇を特定した後、その箇所の主題であるキリストの再臨へと至る終末の一連の出来事を示している。彼は「そのとき、その悪しき者が現れる」と述べる。その「悪しき者」とは教皇のことであり、「主はその口の息をもって彼を滅ぼし、その来臨の輝きによって彼を打ち滅ぼす」とある。さらにパウロは、「彼は、あらゆる力とするしと偽りの不思議を伴うサタンの働きに従って来る」とも言う。イエスこそが「その来臨がサタンの働きに従っている者」である。

サタンの奇跡的な働きの期間は、間近に迫る日曜令から、ミカエルが立ち人類の恩恵期間が閉じられる時までである。恩恵期間が閉じられてからキリストが再臨するまでに注がれる最後の七つの災いの間、サタンは奇跡を一切行わない。

キリストは言われる、「あなたがたは、その実によって彼らを見分けるのである」。もし、癒やしが行われるその人々が、これらの現れを理由にして神の律法の軽視を弁護し、不従順にとどまり続けるなら、たとえ彼らがどれほどの力を持っていようと、それが神の偉大な力であるとは限らない。むしろ、それは大いなる欺き手の奇跡を行う力である。彼は道徳律法の違反者であり、その真の性質を人々の目から覆い隠すために、用いるあらゆる手だてを尽くす。終わりの日に、彼がするしと偽りの不思議

議をもって働くと、私たちは警告されている。そして彼は、自分が闇ではなく光の天使であることの証拠としてそれらを指し示すために、猶予期間の終わりまでこれらの不思議を続ける。『セブンスデー・アドベンチスト聖書注解』第7巻、911頁。

パウロは、教皇権の顕現に先立って背教が起こること、またキリストの再臨はサタンの驚くべき働き「後に」起こることを指摘している。サタンの驚くべき働きは、アメリカ合衆国における日曜法から始まり、恩恵期間の終了と最後の七つの災いの到来によって終わる。サタンの驚くべき働きは、アメリカ合衆国における日曜法から始まる。

「神の律法に反して教皇制度の確立を強制する布告によって、わたしたちの国は義と完全に縁を切ることになる。プロテスタント主義が深い隔たりを越えてローマの権勢の手を取ろうと手を差し伸べ、さらに深淵を越えて心霊主義と手を結び、この三重の連合の影響のもとに、わが国がプロテスタントかつ共和政の政府としての憲法のあらゆる原則を否認し、教皇的な虚偽と惑わしの流布のための規定を設けるとき、わたしたちは、サタンの驚異的な働きがなされる時が来ており、終わりが近いことを知るのである。」『証言』第5巻、451頁。

日曜法は、黙示録13章の地から上って来る獣である第六の王国の終わりである。地から上って来る獣は、教皇支配の一千二百六十年が1798年に終わった時に支配を始めた。したがって、教皇権は538年に顕れたが、世界を支配下に置こうとするその働きは、パウロがその言葉を記した時にはすでに活動していた。538年以前には、神の宮に座する不法の人の出現に先立つ背教があった。

背教は、皇帝コンスタンティヌスに象徴されるように、キリスト教会が異教の宗教と妥協したとき、ペルガモの教会によって表されていた。パウロは、キリストの再臨の前に起こらなければならない予言的な道標を示していた。彼は、以前テサロニケ人に教えたことを振り返った後、こうした真理を以前に彼らに教えたことを覚えていないのかと尋ねる。次に彼は、ある力が教皇権を「withholdeth」しており、「that」教皇権が「might be revealed in his time?」となるのだと彼らに教えたことも、彼らが思い出すべきだと念を押している。「withholdeth」という語は、抑制することを意味する。同じ箇所の後の方では、「withholdeth」という語は「now letteth」と訳されている。

したがって、その箇所は次のように正しく表される。「そして今、あなたがたは、何が教皇権を抑えているのかを知っている。それは、教皇権がその時に明らかにされるためである。というのも、不法の秘密（教皇権）はすでに働いているからである。ただ、今教皇権を抑えている者は、取り除かれるまで教皇権を抑え続けるであろう。」ウィリアム・ミラーがテサロニケ人への手紙のこの箇所を理解したとき、538年に教皇権が地上の王座に登るのを妨げた力は異教ローマであり、異教ローマが「取り除かれる」まで、異教ローマが教皇権の台頭を抑え続けるのだと悟った。

理神論者であった十二年間、私は見つけられるかぎりの歴史書をすべて読んだ。しかし今や私は聖書を愛していた。聖書はイエスのことを教えてくれた！ それでもなお、私には聖書の多くの部分が暗く、わからなかった。1818年か19年のこと、私はある友人を訪ね、その友人と語り合っていた。彼は私が理神論者だったころの私を知っており、そのころの私の話ぶりも聞いていた人だった。彼はどこか意味ありげに、「この

聖句やあの聖句をどう思う？」とたずねた。私が理神論者だったころに異議を唱えていた聖句を指してのことだった。私は彼の意図を悟り、「時間をいただければ、それらが何を意味するのかお話しします」と答えた。「どれくらい時間が欲しい？」と彼。「わかりませんが、必ずお話しします」と私は答えた。神が理解できない啓示をお与えになったはずがないと信じていたからである。そこで私は、聖霊の意味するところを見いだせると信じて、聖書を学ぶ決心をした。ところがその決心を固めるやいなや、「もし理解できない箇所に出会ったらどうするのか」という思いが浮かんた。そのとき、次のような聖書の学び方が心に浮かんた。すなわち、そうした箇所の語を取り上げ、その語を聖書全体にわたってたどり、この方法で意味を突き止めようというのである。私はクルーデンのコンコルダンスを持っていたが、これは世界一のものだと私は思っている。そこでそれと聖書を手に机に向かい、新聞を少し読むほかは何も読まずに、聖書が何を意味しているのかを知ろうと決意して取り組んだ。

私は創世記から読み始め、ゆっくりと読み進めた。そして、理解できない聖句に出会うと、その意味を知ろうとして聖書を調べた。このようにして聖書を読み通したあと、ああ、なんと真理は明るく輝かしく現れたことか！ 私は、これまであなたがたに説いてきたことを見いだした。私は、七つの時が1843年に満了したのだと納得した。さらに二千三百日に至ると、それもまた私を同じ結論へと導いた。しかし、救い主がいつ来られるかを突き止めようなどとは思っておらず、それを信じることもできなかった。だが、その光はあまりに強く私を打ったので、どうしてよいかわからなかった。今こそ拍車とブリーチングをつけねばならない、と私は思った。聖書より先走りはせず、またそれに遅れもしない。聖書が教えることは何であれ、それを堅く守ろう。けれどもそれでも、どうしても理解できない聖句がいくつかあった。

彼の聖書研究の一般的な方法については以上である。別の機会に、彼は私たちの目の前の本文——『常の供え物』の意味——を確定する自分の方法を述べた。彼は言った。「私は読み進めたが、それが見出される別の例はダニエル書以外には見つからなかった。それで、これと結びついている語、『取り去る』を取り上げた。『彼は常の供え物を取り去る』『常の供え物を取り去られる時から』等々。私はさらに読み進め、この本文に光は見いだせないだろうと思った。ついに私はテサロニケ人への第二の手紙2章7-8節に至った。『不法の神秘は既に働いている。ただし、今それを妨げている者が、道から取り除かれる時まで妨げている。そしてその時、あの不法の者が現れる』等々。そしてその箇所に来たとき、ああ、なんと明確で栄光に満ちて真理が現れたことか！ そこにある！ それが『常の供え物』だ！ さて、それでは、パウロが『今それを妨げている者』と言うのはどういう意味か。『罪の人』や『不法の者』とは教皇制を意味している。では、教皇制が現れるのを妨げているのは何か。そう、それは異教である。そうすると、『常の供え物』は異教を意味しなければならないのだ。」

ウィリアム・ミラー、アポロス・ヘイル『The Second Advent Manual』65、66。

ダニエル書における“the daily”が異教の象徴であるという理解なしには、ミラーは自らの預言的構造を組み立てるための枠組みを築くのに大いに苦労しただろう。“the daily”はダニエル書に五回登場し、しかも常に教皇制の象徴がそれに続く。“the daily”がダニエル書において異教を指すという証拠は、パウロのテサロニケ人への手紙に見いだされる。そこには、神の言葉の中でも最も厳しい警告の一つが記されており、真理を愛さない者には強い惑わしが送られるとパウロが明確に述べている。テサロニケ人への手

紙に意図的に置かれたその真理とは、異教と教皇制の結びつきの特定であり、その真理を拒むことは、その拒絶の結果として強い惑わしがもたらされることを保証するに等しい。

この話題は次の記事で続けます。

あなたがたは立ち止まって驚け、叫び叫べ。彼らは酔っている、しかしぶどう酒によるのではない。よろめいている、しかし強い酒によるのではない。主があなたがたの上に深い眠りの霊を注ぎ、あなたがたの目を閉ざされたからである。預言者とあなたがたのかしらたち、先見者たちを、主はおおわれた。すべての幻はあなたがたにとって封じられた書物のことばのようになった。人々がそれを学識ある者に渡して、「どうぞ、これを読んでください」と言うと、彼は「できません。封じられているからです」と言う。また、その書物は学のない者に渡されて、「どうぞ、これを読んでください」と言われると、彼は「わたしは学がありません」と言う。それゆえ、主は言われた。この民は口をもってわたしに近づき、唇をもってわたしを敬うが、その心はわたしから遠く離れており、そのわたしへの畏れは人の戒めを教え込まれたものにすぎない。それゆえ、見よ、わたしは再びこの民のうちに驚くべきわざを行う。まことに驚くべきわざ、不思議なわざを。彼らの知恵ある者の知恵は滅び、彼らの悟りある者の悟りは隠される。わざわいだ、主からそのはかりごとを深く隠そうとする者たち。そのわざは暗やみの中にあり、彼らは言う、「だれがわれわれを見ようか。だれがわれわれを知ろうか」と。あなたがたの物事を逆さまにすることは、陶器師の粘土と同じものと見なされるべきであろうか。造られたものが自分を造った者について、「彼はわたしを造らなかつた」と言うであろうか。形造られたものが自分を形造った者について、「彼には悟りがなかつた」と言うであろうか。イザヤ書 29:9-16。